

田牧一郎の 第47回 カリフォルニア稲作便り

契約交渉の本格化

カリフォルニアでは、2001年産米の栽培契約の交渉が本格化してきました。

生産者と、買い手である精米業者や穀物商社との売買契約です。毎年、作付け

前のこの時期に、各社が生産者に対して予定買い取り価格と買い取り目標数量を提示します。

今年は非常に低調です。この夏の端境期の持ち越し在庫が予想通り多くなり、そうしたことや、作付け面積が大きくは減少しそうにもないことが、各社が活発に動けない状況を作っています。

●大きな在庫 生産は減らず

昨年の作付け面積の増加と平年並みの反収から、端境期の在庫がふくむ可能性が大きくなりました。

CCC国際相場との差損調整対策が行われたことや、アメリカ政府のキューバや中東への経済制裁措置緩和策でコメ輸出が可能となったことから、輸出は若干増加するものの、2000年産米は総生産量が大きく、2001年産米の価格を押し上げるような効果は無いようです。

国内消費も毎年順調に伸びています。価格が低く

なり更に精米業者間の販売競争が激しくなったことも手伝っていると思われます。しかし大きな生産量をすぐに吸収してくれるほどの消費増は期待しすぎです。

2001年の予想作付け面積も価格に与える影響が大きい要因です。これがどうも昨年に比べ、大きくは減少しそうにないという観測が流れています。理由ははっきりしています。カリフォルニアの稲作地帯では今年も利益の出そうな作物が見当たらず。



稲ワラを腐らせるためにこの冬の時期に水を入れてある水田



たまき・いちろう／1952年12月郡山市生まれ。中学卒業と同時に就農。89年渡米。カリフォルニア州で稲作（約80ha）を開始。タマキ・ファームス・ジャパン TEL045-781-6426 FAX 045-781-6427

ず、今まで栽培してきた作物も買い取り契約が減少していて、経営環境が良くありません。

そのなかでコメは連邦政府の保護政策の中にある、利益が期待できないまでも何とか経費はまかなえるレベルにあります。精米業者や穀物商社の契約価格は低くとも、政府の所得保障補助金とCCCのローンの組み合わせで、何とか採算割れは防ぐことができます。しかし所得保障の補助金も今年は対前年比で支払い単価が約30%削減され、昨年も支給された緊急補助金も今年はどうなるか予想できない状況です。

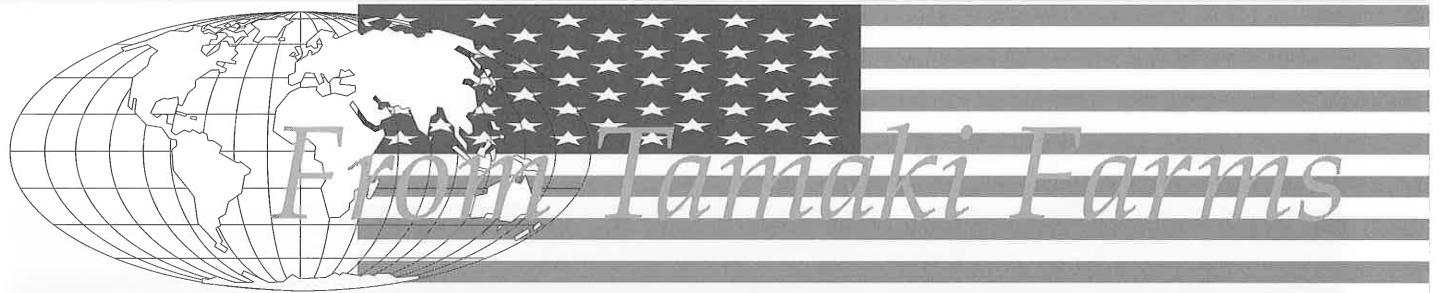
とは言え、何か生産しておかないと雇用している従業員の給料も支払えなくなるし、機械や設備の支払いもしなければなりません。

従って何か「とりあえず損をしない作物、利益が出なくても経費をまかなえる作物」を選び作付けをします。コメがこの「とりあえず損をしない作物」に当たるのです。

●上がらぬ価格水準

流通段階での持ち越し在庫が大きく、作付け面積の減少も大きくは見込めない状況での販売は、どうしても価格を下げて持っているコメを売り切ることが努力を注がれます。

2001年産米も豊富に出回ることが予想されま



すので、価格は下がることがあっても上がることはまず期待できません。そのため今年は生産者に対する契約条件の中で、価格は限りなく低くし、契約数量は必要最低限にとどめます。粳が必要な時はいつでも購入できる状況になりますので、無理をする必要はありません。粳の買い手である精米業者や穀物商社の方針に特別の変化がない限り、低水準の価格帯で今年のコメの栽培契約が進められると思います。

製品価格も本来であれば電気料金や人件費が年明けから大きく上昇したことにより、精米工場からの出荷価格に転嫁されるはずですが、現状では価格転嫁どころの話ではありません。

各精米業者が低価格での販売競争に入ってしまったため、とても生産コスト上昇を製品に乗せることはできなくなつてしまいました。新しく販売先を開拓しようと思つたらさらに大きな値引き販売によつて、販売ルートを獲得しなければならぬ状況です。しばらくこのような状況が続くものと思われま

す。カリフォルニア米のセールスポイントである「良質米」「おいしい米」を代表する、短粒種や中粒良質米の小売価格は思つたほど下がっていないのも実態です。

1月中旬、サンフランシスコとサンノゼの日本食を扱うスーパーで小売価格を見て来たのですが、2000年産米が出回る前とほとんど変わっていませんでした。コシヒカリやササニシキ、改良品種、あるいはあきたこまちなどを使った短粒種は10kgで15ドル前後、そして中粒種では10kgあたり10ドル前後になっていました。

価格が昨年のコメと大きく変わっていないのは、燃料の値上がりによる輸送コストの上昇、人件費の上昇、最近では電力やガスなど光熱費の上昇と産地から消費者に着くまでのコストがどんどん上昇しており、精米工場からの出荷価格が下がった分のかんりの割合を吸収してしまったからだと考えられま

す。

●新しい投資 精米業者の生き残り

相変わらずアメリカ国内のコメ市場は拡大しています。もともと一人当りの消費量が少なかったため、まだまだ消費が増加する余地があります。精米業者の低価格競争が流通段階のコスト上昇を吸収し消費者価格の上昇を抑え、結果として国内消費を増加させる効果を出しており、これを将来の投資と考えればいつか必ず利益として返ってくることにあります。

しかしその時まで継続して販売できなければ、だれか他の人がこの利益を得ることになります。

昨年から今年にかけて2つの大型精米工場がカリフォルニアにできました。一つは新しい会社の精米工場ですが、もう一つは古い工場が火災で焼け、その再建設です。

再建時に精米能力を大きく増やしたと聞いておりますので、この2つの工場を合わせると純粋に年間約15万トン近い精米能力が増えたことになりました。

中東や日本への輸出ビジネスが多い会社ですが、アメリカ国内販売にも力を入れ、既存のマーケットに入ろうとしています。最新の精米プラントであることを強調して販売活動をしています。

しかし、逆に消えていくところもありました。

昨年暮れカリフォルニアを代表していた精米工場が操業を完全に停止しました。何とか生き残りを試みたとのことですが、残念ながら精米業界からの完全な撤退となりました。RGA (Rice Growers Association) カリフォルニアのコメ生産者の組織で、

農協として乾燥プラントや精米工場を所有し、一時はカリフォルニア米の生産量の半分以上を精米販売していた歴史のある組織でした。乾燥プラントや精米工場など所有していた資産を処分し、再スタートした時期もありましたが、結局利益の出る精米業者

には戻れず廃業を余儀無くされました。

カリフォルニアで生産される粳は毎年約200万トンです。これを誰が精米して販売するかは時代とともに変わってきました。ここ15年でカリフォルニアには7つの新しい精米工場が建設されました。それまであった4つの大きな精米工場のシェアを取る形でそれぞれ運営しています。しかしかつての巨大な組織が倒れたとはいえ、カリフォルニア内の精米能力は余っています。今、稼働している精米工場が一定のパイを分けあっているのか、あるいはまだどこかが操業を止めることになるのか予断は許されません。

激しい競争の時代に入ってしまったカリフォルニアの精米業界です。強いもののみが勝ち残れる厳しい資本主義の現実を感じています。

●水問題は 一安心

昨年暮れから1月上旬にかけて、カリフォルニアは大変良い天気が続きました。過ごしやすくして良いのですが、12月は記録的な小雨で、1月上旬のダムの水量が平年の50%を下回り、水不足を心配しました。冬の間に降る雨と山に積もる雪が頼りのカリフォルニア稲作ですので、ほどほどに降ってもらわないと大変なことになってしまいます。実際には降水量の少ない乾燥した冬が2年以上続くと、水の供給制限が始まるので2001年の作付けに直接影響することはないようです。

そして幸いにも1月中旬にはまとまった雪がカリフォルニアの水源である北部および東部の山沿いに降り、平地にも雨が降りました。4月の作付けまでの間に何度かまとまった雪と雨があれば水不足は解消できますので、平年なみに水の供給は行なわれることになります。

今年もカリフォルニアの稲作地帯に必要な灌漑用水は100%供給されそうですので、この点は安心して作付け計画が立てられます。